

随想「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第33回 「サムライのDNA」対「ムラの原理」

1. あなたはサムライの子孫でしょう

ライオンズクラブの活動として、ノルウェーのアストリッドという女子高校生を1カ月ホームステイさせたことがあった。彼女は日本の漫画とアニメが大好きなため日本を選んだので、日本語も片言ながらできた。「ワジサビ」という言葉も知っていて、日本文化に強い興味を抱いているようだった。

ただ彼女は逞しい。自分が将来何をやるか、何ができるか、真剣に考えているようだった。英語は既に実用レベルで、スペイン語もかなりのものだった。「どうしてノルウェーはEUに加盟しないの」と聞くと、そのような社会問題に対しては自分の意見を力説していた。学校で、普段からそのような議論をしているとのことだ。受験勉強の範囲内でしか興味を示さない日本の高校生とはだいぶ違う17歳だった。ある時、女子大生にエスコートをしてもらって都内見学をさせたが、みていると、どう見ても高校生の彼女のほうが大人という感じがした。

私が、「さすがにバイキングの子孫だね」というと、すかさず彼女は「あなたはサムライの子孫でしょう」と切り返してきた。

「サムライ」は、アニメを通してであったが、逞しくかっこよいあこがれの人物像のようであ

あった。そう言われながら、今の日本人はどう見ても「サムライ」とは程遠いので、言われて気恥ずかしかったが、考えてみれば、確かに日本には彼女があこがれて当然の、かっこいい「サムライの時代」があったのだ。

2. 日本が歴史上最も輝いていた時代

海外に出たがらない今の日本人からは想像もできないほど、海外に飛び出し、飛躍していった日本人の時代があった。それは応仁の乱（1467～1477）が終わってから鎖国令（1633～39）までの約160年間だ。この点は、すでに、本稿の、第5回で詳説したものである。

応仁の乱はそれまでの支配体制を崩壊させ、日本は戦国時代に入るが、戦国大名は国力を充実させるための最も重要な手段として商業の振興を図った。この時代に日本は経済的に大いに発展し、日本全体が競争社会となり、その勢いは国内にとどまらず広く海外にまで発展していった。当時の日本人は、日本と中国の明や南方との貿易だけでなく、南方と明間という間接貿易にも活躍するようになっていった。そして、あちこちに日本人町を築いていった。

日本人は、同時にポルトガル人、スペイン人と競って交易し、そこに、オランダ、さらにイギ

リスも加わってきた。当時の日本人の視野は、世界全体に広がっていったのだ。東北の伊達正宗は太平洋をまたいでメキシコとの交易を計画し、1613年、支倉常長以下180人の使節をヨーロッパに送り出した。日本人の勢いは、太平洋を越えようとしていたのだ。

日本人がこの様に海洋民族の如く海外に飛び出していった時代、日本の文化も高度に発達した。茶道という日本独自の芸術はこの時期に完成を見たし、能という人類史上まれにみる抽象度の高い芸能が盛んにおこなわれるようになったのもこの時代だ。これらの文化を育て支えたのは、戦国武士であった。

絵画では、桃山期の長谷川等伯、狩野永徳、これに続く俵屋宗達、尾形光琳の活躍は、日本の絵画芸術が歴史上最も充実した時代であった。彼らの芸術はヨーロッパの絵画水準に決して劣らない。この勢いを支えたのも戦国武士であった。

3. サムライのDNA

戦国大名と商人は、競って世界に飛び出していった。そこには、個人の才覚がものをいう「甘え」とは無縁の世界が展開していた。戦国という、不毛な戦いの時代という印象を持つかもしれないが、実は国同士が競い合う中で、社会の活力が生ま

■ 随想 「甘え」が日本を滅ぼす

れ、経済が充実し、文化が高度に発展する時代である。

戦国時代の中国は、孔子や老子、墨子といった偉大な哲学者を輩出した諸子百家の時代で、中国が最も輝いていたと言えよう。現代文明の基礎となった古代ギリシャの文化も、ポリス間の抗争の中から花開いたものだ。

ヨーロッパは、その地政学的状況から、中程度の国と小国が錯綜し、戦国時代が常態化しているといえる。その結果、ルネッサンス後のヨーロッパは、互いに競い影響し合う中で大発展し、近代科学、産業革命、近代的民主制を生みだしていった。

戦国時代は、戦に勝つために知恵を絞り合った。それは激しい競争の時代であり、個性が重要視され、独創性が尊重された。それが、経済も発展させ文化も充実させるのであった。日本の戦国時代も、その典型であった。

桶狭間の戦いでは、2万の今川義元軍を、2000の織田軍が破った。それは知恵の勝利であった。戦国大名は、鉄砲が戦いに有効と見れば、自ら製造し戦場に持ち込んだ。先例に従って一族が滅びるし、変わることに躊躇するようでは、国が滅びた時代であった。

才覚あるものが天下をねらう下克上の世界であり、個人の能力が尊重され、実力あるものが尊重される時代だった。みんな

一緒であることが善とされ、競争を「弱肉強食」といつて忌み嫌い、終身雇用と年功序列に住することを理想とする、「ムラの原理」が支配するのが今の日本だが、それとは全く逆の世界がそこにはあった。「ムラの原理」は、本稿の第3回で説明したとおり、「甘え」を生み出す揺り籠なのだ。

戦国時代、武士は16才くらいで元服し、一人前の武士として戦場に出て行った。「甘え」については、いっぺんに首を取られてしまふ。親離れして一本立ちすることが、常に求められた。親も何時命を落とすか判らない時代であった。親がいなくても生きていける逞しい個人を育てることが親の責任であった。

他方、今の日本人は20歳になつても親離れできず、大学の入学式どころか、卒業式まで親が出席し、大学が親のための就職説明会を開かなければならないという。何時までも、親離れ、子離れが出来ず、親に対する「甘え」が抜けないのだ。今の日本人は戦国時代の日本人とは全く異質である。

商機を求めて世界に発展し、文化を愛し、個人として逞しい戦国武士は、「サムライ」という表現が最も似合うと言えよう。「サムライ」は、自分で判断し自分で責任を取る。戦場で我が身を守るのには、自分でしかないか

らだ。そして、自分で自分の進むべき道をさがし、自分の人生は自分で責任を負う。戦いに強みだけがなく、広い視野を持ち文化も愛する。それが「サムライ」である。

今の日本人は逆に「やっつてほしい人間」だ。自分の生活がうまくいかなければ、社会が悪い、政治が悪いということになる。このように「甘え」が満ちて、停滞した日本を根本的に変えるための原理として、「サムライの精神」を挙げたい。もちろん、刀でなく知性と才覚で道を切り開くものであるが。

こういうと、サムライではなく「武士道」はどうかという人もいるだろうが、武士道は「道」とつくところに「ムラの原理」を感じさせるので、注意を要する。

遅く育てるといふと、徴兵制の復活を挙げるものが多い。しかし、徴兵制は「ムラの原理」である。人間を命令に絶対服従する従順な兵士に仕立てるもので、「サムライ」とは異質の人間を作ってしまう。今の日本が必要なのは、命令に従順な人間を量産するのではなく、命令を出す側の「サムライ」が必要なのである。

「サムライの精神」は、鎖国と幕藩体制の中で封印された。若い下級武士がこの幕藩体制をひっくり返した明治維新は、「サ

ムライ」の復活といつてよい。しかし、「坂の上の雲」の司馬遼太郎が言うとおり、日本が輝いていたのは、日露戦争までであった。

明治新政府は、国民を教育勅語という「ムラの原理」で従順に仕立てようとしたが、それが失敗であった。教育勅語人間が、国を滅ぼしてしまったのだ。だが戦後、教育勅語は廃止されたが、それが亡霊の如く残り、「あてがいぶち教育」が頑固なまでに支配している。

日本を変えるためには、本当の意味での「サムライ」の復活が必要であるが、それは可能である。日本人には、「サムライ」のDNAが受け継がれているはずだからだ。



金子博人
(かねこ ひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程（商法）終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会（IFTA）会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員（東京工業品取引所。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。